

3

海外研修



カンパラの道路脇にて

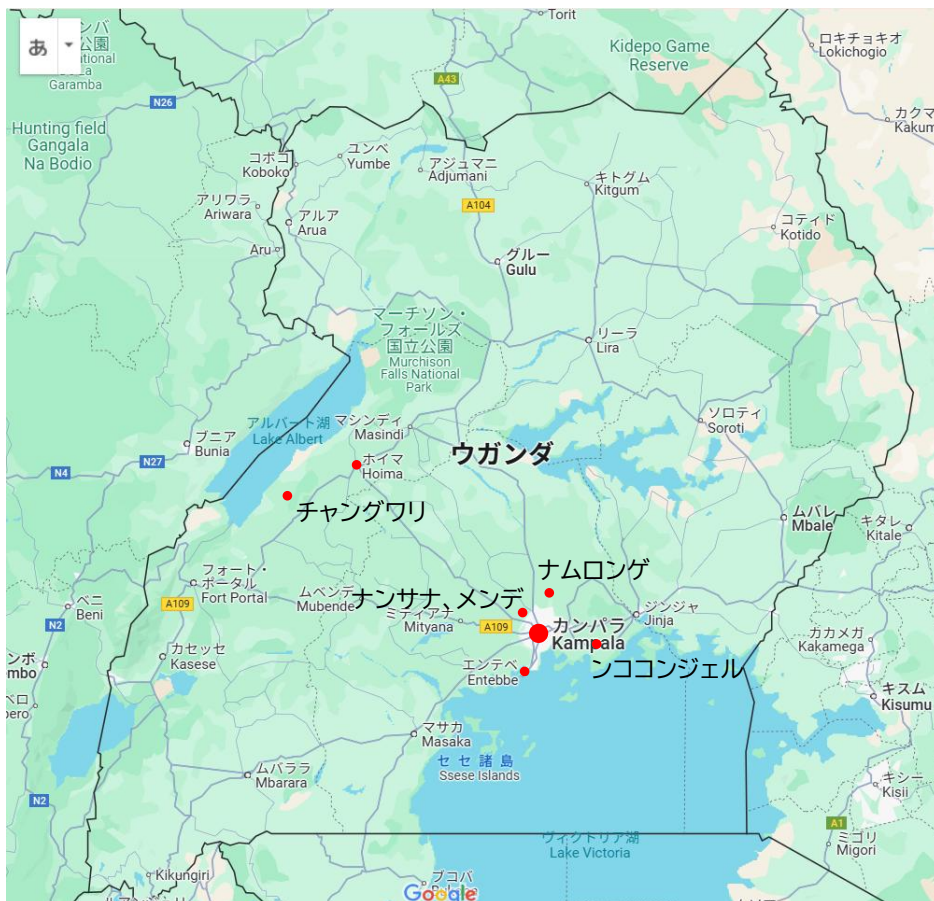
海外研修の訪問先(日程表)

日	時間	訪問先
7/21(月)	19:00	成田空港集合
	22:25	成田発ドーハ経由 QR807
7/22(火)	3:20-10:00	ドーハ着、ドーハ発 QR1383
	15:20	ウガンダ(エンテベ)着→宿泊先へ移動
7/23(水)	8:45-9:30	事務所ブリーフィング
	9:30-10:00	安全管理ブリーフィング
	10:00-10:15	休憩
	10:15-10:35	農業分野協力概要
	10:35-11:15	JICA のウガンダにおける難民支援+山田専門家のお話
	11:15-11:45	インフラ分野協力概要
	11:45-13:30	昼食兼移動(JICA 事務所→在ウガンダ日本国大使館)
	13:30-14:50	在ウガンダ日本国大使館 表敬
	14:50-15:15	移動(JICA 事務所→カンパラフライオーバー)
	15:15-16:00	「カンパラ立体交差建設・道路改良事業」視察(帰国研修員 Mr. Arthur Mijumbi 同行)
	16:00-16:30	移動
	16:30-17:30	交通管制センター視察、「KIIDP 交差点」
	17:30-18:00	移動(宿泊先へ)
7/24(木)	8:00-12:00	移動(カンパラ→ホイマ県ホイマ市)
	12:00-14:00	昼食兼移動(ホイマ市→ホイマ県プリンディ)
	14:00-17:00	プリンディ地域農業調査開発研究所訪問 金井美紀隊員(食用作物・稲作栽培)活動地視察
	17:00-18:00	移動(ホイマ県プリンディ→ホイマ市(宿泊先))
7/25(金)	8:00-8:30	移動(宿泊先→AAR ホイマ事務所)
	8:30-9:00	AAR(難民を助ける会)ホイマ事務所訪問
	9:00-11:00	チャングワリ難民居住地へ移動(道中、ホストコミュニティの初等教育校短時間訪問)
	11:00-12:15	チャングワリ中等教育校訪問

	12:15-13:30	昼食兼移動
	13:30-14:30	モンバサ初等教育校へ移動
	14:30-15:00	モンバサ初等教育校訪問
	15:00-16:00	モンバサ初等教育校に通う児童の家庭訪問
	16:00-18:30	移動(⇒宿泊先)
7/26(土)	8:00-12:30	移動(ホイマ⇒カンパラ)
	12:30-14:00	昼食
	14:00-16:00	カンパラ市内視察(モスク、クラフトマーケット等)
7/27(日)	8:15	集合
	8:30-9:30	移動(カンパラ⇒エンテベ動物園)
	9:30-12:30	Uganda Wildlife Conservation Education Centre(エンテベ動物園) ・草の根事業(コンゴヨウム保全)中部大学 牛田先生との交流 @African Grey Parrot Conservation Centre ・Behide the Scenes ツアー(藤村悦史隊員(小学校教育)同行)
	12:30-13:30	昼食
	13:30-14:30	移動(エンテベ動物園⇒ホテル)
	午後	振り返り会議、報告会準備など
7/28(月)	7:30-9:00	移動(ホテル(カンパラ)⇒ナムロンゲ)
	9:00-11:00	コメ振興プロジェクト視察(JICA 筑波 帰国研修員、専門家)
	11:00-14:00	移動(ナムロンゲ⇒ブウイクエ県ンココンジェル)
	14:00-16:30	リーチアウト ンココンジェル パリッシュ HIV/AIDS イニシアティブ 訪問 瀬戸凌平隊員(コミュニティ開発)活動地視察
	16:30-18:30	移動(ブウイクエ県ンココンジェル⇒カンパラ)
	8:00-9:00	移動(宿泊先⇒ナンサナ)
7/29(火)	9:00-12:30	あしながウガンダ訪問
	12:30-13:30	昼食兼移動(ナンサナ⇒メンデ)
	13:30-16:30	メンデカレマ小学校訪問 浦田萌子隊員(小学校教育)活動地視察
	16:30-18:30	移動(ワキソ県メンデ⇒Yamasen)
	18:30-21:00	JICA ウガンダ事務所との会食(Yamasen) 宮下さんの講話(オンライン)
	21:00-21:30	ホテルに戻る

	8:00	移動(ホテル→ウガンダ事務所)
7/30(水)	8:30-9:30	JICA ウガンダ事務所報告
	9:30-10:00	伴企画調査員(安全管理/栃木県小山市出身)インタビュー
	10:00-11:00	最終振り返り
	11:00-11:50	移動(ウガンダ事務所→ホテル)
	11:50-14:00	昼食兼移動、エンテベ空港着
	17:30	ウガンダ(エンテベ)発 QR1384 ※遅延
	22:35	ドーハ着 ※遅延の為ドーハで待機
7/31(木)	2:45	ドーハ発 QR806 ※前便遅延のため振替
8/1(金)	19:10	成田着 ※前便遅延のため

海外研修の訪問先地図



Google Map より

各訪問先での研修者の学びや気づき

※各日の報告は日直の記録による

7/22(火) 日直:諸星 智慶

ウガンダ到着

《訪問先で行ったこと》

- 成田空港を発ち、カタールのドーハを経由した後、ウガンダのエンテベ空港に到着しました。ほぼ丸1日かかるような長いフライトでした。この研修中、バスの運転手としてお世話になるゴドフリーさんの運転で、空港から首都カンパラの街並みを見ながら、拠点となる「ゴルフコースホテル」に向かいました。

《訪問先での感想》

- 気温23度と快適でした。バスから街並みを見ると、アフリカらしい赤土、至る所にあるバナナの木、歩いて下校する子ども達の色鮮やかな制服と笑顔が素敵でした。特に心に残ったのが、車とバイクタクシー「ボダボダ」の通行量の多さです。車間距離や車線への進入がギリギリすぎて、日本と比べると信じられない光景でした。



成田空港にて



ウガンダ到着！



初めて見るウガンダの街並み

1日を通して

お店に並ぶものや人々の働き方、交通ルールやマナー、子ども達の生活など、バスの中から見た街の様子だけでも多くの日本との違いに気が付きます。「どんな違いがあるかな？」と問いを投げかけてから、撮影した動画を流すことで、子ども達が発見した意見が飛び交うような楽しい国際理解学習の導入ができそうです。

7/23(水) 日直:宮本 渚

JICA ウガンダ事務所

《訪問先で行ったこと》

- ・ JICA ウガンダ事務所にて、JICA ウガンダ事務所の方々から、ウガンダの概要やウガンダにおける JICA 事業(コメ振興プロジェクト、難民・ホストコミュニティ支援プログラム、運輸・交通プログラム等)の概要を伺いました。

《訪問先での感想》

- ・ 様々な分野で支援を行っており、日本の技術が生かされていたり、日本の企業がかかわっていたりすることを知りました。現場の視察でも、様々な場面で日本とのつながりを見付けたいと思いました。また、ウガンダの難民支援や農業支援での課題を知り、多面的に考えるよいきっかけをいただきました。



JICA ウガンダ事務所でのブリーフィング

在ウガンダ日本国大使館

《訪問先で行ったこと》

- ・ 在ウガンダ日本国大使館を表敬訪問しました。参事官や大使館職員の方に、ウガンダの概要や大使館の役割(ODA、経済協力、要人の往来、人的交流)についてお話を伺いました。

《訪問先での感想》

- ・ 在ウガンダ日本国大使館訪問というとても貴重な機会をいただきました。ODA だけでなく、人的交流(留学生、日本の大学生のスタディツアーなど)も盛んであることを知りました。また、ウガンダと日本の二国間のかかわりだけでなく、周辺諸国も含め経済を安定させることが大切だという新たな視点を得ることができました。

カンパラ立体交差建設・道路改良事業視察

《訪問先で行ったこと》

- ・ JICA職員の方や建設交通省職員(帰国研修員)の方に同行していただき、カンパラ立体交差を視察しました。カンパラ立体交差を建設したことによる交通状況の変化、カンパラ立体交差に生かされている日本の技術、カンパラ立体交差建設で大変だったことなどについてお話を伺いました。

《訪問先での感想》

- ・ こんなにも日本の技術が生かされているのかと驚きました。また、カンパラ立体交差が建設されたことで交通状況の改善が見られたものの、現地の方々に新しいものを受け入れてもらうのはとても難しいことなのだと思います。交通ルールを守ってもらえるように、現地の方々の意識を変えていくことが課題だと感じました。

カンパラ交通管制センター視察

《訪問先で行ったこと》

- ・ カンパラ交通管制センターにて、カンパラ市交通管制改善計画について、計画に携わっているコンサルタントと日本信号の方からお話を伺いました。また、実際に MODERATO 制御(青時間の自動生成)を行っているコンピュータを見させていただきました。

《訪問先での感想》

- ・カンパラ市内で日本の交通信号システムを導入することで、交通渋滞の緩和が見込めることを知りました。また、ウガンダの方々は交通ルールは分かっている(リテラシーはある)が慣習で行っているため、分かっているけど交通ルールを守れないというお話が印象的でした。慣習を変えるのは本当に難しいと感じました。



カンパラ立体交差(フライオーバー)



交通管制センター

1日を通して

ウガンダと日本は様々なところでつながっているということ子どもたちに伝えたいです。また、カンパラと日本の交通の様子を写真で比較することで、共通点(信号機、日本車が多い等)や相違点(渋滞、慣習等)を見付けることで、日本とのつながりや文化の違いを感じたり、課題について考えたりすることができると思います。

7/24(木) 日直:倉沢 美穂

プリンディ地域農業調査開発研究所:金井美紀隊員(食用作物・稲作栽培)の活動視察

《訪問先で行ったこと》

- ・金井隊員からは米の優良品種改良や栽培方法、瀬戸隊員からはコメ振興や女性支援、養殖支援といったコミュニティ開発支援について話を聞きました。また、マトケ圃場ではマトケの栽培方法を学び、収穫や運搬を体験、そして農家さんが調理したマトケを試食しました。

《訪問先での感想》

- ・支援の難しさに直面しながらも、現地の人々に愛され、溶け込んでいる隊員の方々の姿に感銘を受けました。そこから生まれる苦労や新たな課題は、現地での活動があってこそだと感じます。しかし、その姿はとても輝いていて、かっこよかったです。



金井隊員と現地施設のカウンターパート、スタッフ



バナナ収穫体験

1日を通して

隊員の方々の支援に対する熱意や、これまでの人生経験がどう今に繋がっているのかを知ることで、生徒のキャリア教育の充実に役立てたいと感じました。食というテーマでのマトケ収穫や運搬体験は、生徒にとって関心が高く、貴重な教材になると思いました。

AAR Japan(認定 NPO 法人 難民を助ける会)

《訪問先で行ったこと》

- ・ AAR のホイマ事務所にて、AAR 秋山さんから全体の事業説明(難民支援、地雷・不発弾対策、障がい者支援、災害支援、感染症対策/水・衛生、提言/国際理解教育)とウガンダでの事業説明について伺いました。

《訪問先での感想》

- ・ AAR Japan が難民支援をはじめとした多くの世界的課題に取り組む団体であることを知りました。また、「世界人口の約 69 人に 1 人が難民であり、その約 40%が 18 歳以下である」などの事実を知り、難民をつくりだしてしまう要因や難民を受け入れる方法など、深く考えさせられる大きなきっかけとなりました。

チャングワリ難民居住地内ホストコミュニティの初等教育校

《訪問先で行ったこと》

- ・ ウガンダでは Open Door Policy という難民受け入れの考え方があり、その土地に元から居住していた人々と難民が区別なく共に生活できるような仕組みがあります。ホストコミュニティとは、難民を受け入れる側の人たちということで、初等教育校の様子を 10 分ほど見学させていただきました。

《訪問先での感想》

- ・ 事前説明で聞いていたように、教室の中にいる生徒の数は学年が上がっていくと少なくなっているようでした。また、教室の壁に貼ってある模造紙はすべて手書きの物で、数学の公式や人体の解剖図、アフリカや世界地図などがありました。特に世界地図には誤りがあり、ウガンダの公立の学校の現状が厳しいものだと感じました。



AAR Japan 事務所にて



授業の様子

チャングワリ中等教育学校

《訪問先で行ったこと》

- ・ 難民支援のために造られた学校で、新しい校舎とトイレ、水道、井戸など、敷地内の設備が充実している様子を、AAR 秋山さんと校長先生の説明を受けながら見て回りました。女子寮は中も見学させていただきました。また、最後に約 100 名の生徒さんたちと交流授業を行い、その中ではよさこいソーラン、大縄跳びをしました。

《訪問先での感想》

- ・ 難民のための学校の方がウガンダの公立校よりも設備が整っており、もどかしさを感じました。チャングワリの生徒は私達を歓迎してくれ、ソーラン節を全員で踊った時は言語や民族の壁を越えて一つになれたような気がしました。生徒が照れながらも話しかけてくれ、一緒に写真を撮って！と交流してくれたことが嬉しかったです。

モンバサ初等教育校

《訪問先で行ったこと》

- ・ モンバサ初等教育校の授業を見学させていただきました。その後、この学校に通う生徒の中で AAR が支援をしている2家族の家庭訪問をし、その生徒へインタビューをさせていただきました。

《訪問先での感想》

- ・ 授業に積極的に参加する子供たちの姿が印象的でした。インタビューした子供達は、勉強が好きで毎日学校に行きたいと言っており、弁護士や医者などの夢を持っていました。その子供たちの希望を失わせることのない世界にしたいと思うと同時に、自分が担当する日本の生徒たちにも希望を持って勉強を頑張ってもらいたいと感じました。



みんなでソーラン節！



笑顔あふれる子どもたち

1日を通して

「難民」という言葉を説明することはできるけれど、難民を取り巻く世界の現状を伝えることは難しいと改めて思いました。しかし、世界を担っていく生徒にこそ知ってもらわなければならないし、考えてもらわなければならないと思いました。答えがある内容ではないので、「生徒と共に考える」という姿勢で伝えていきたいです。

7/26(土) 日直:滝本 大翔

クラフトマーケット

《訪問先で行ったこと》

- ・ クラフトマーケットにて、各自、日本に帰ってから教材となりそうなものや、お土産などを買いました。服や布、太鼓などの楽器を買う人が多かったです。

《訪問先での感想》

- ・ マーケットの中に1歩足を踏み入ると、現地の方が一斉に話しかけて来て、商売人の熱気を感じることが出来ました。現地で買ったものを置くだけで雰囲気が出るので、学校でウガンダコーナーを作る先生が多かったようです。



クラフトマーケットの入り口

1日を通して

朝に前日の振り返りをして、難民居住区でのことをみんなで共有しました。「自分がモヤモヤしたことをそのまま生徒に伝えて、一緒にモヤモヤ考える」「外から見えた景色から勝手にこちらが解釈するのはどうなのか」などの新たな視点は授業に役立てられそうだと感じました。

7/27(日) 日直:坂入 晃

ウガンダ・ワイルドライフ・コンサベーション・エデュケーション・センター(UWEC)

《訪問先で行ったこと》

- ・ UWEC を訪問し、園内で飼育されているライオンやキリン、ハシビロコウなどを見ました。また、スタッフの方から動物の保護活動や密猟から救出された動物たちの受け入れについて説明を伺いました。

《訪問先での感想》

- ・ UWEC では、動物たちが保護され新しい環境で生活している様子を見て、自然保護の重要性を改めて感じました。単なる観光施設ではなく、教育や保護の役割も担っていることに驚き、支援の在り方についてもっと学びたいと思いました。

カンパラ・セントラル・モスク

《訪問先で行ったこと》

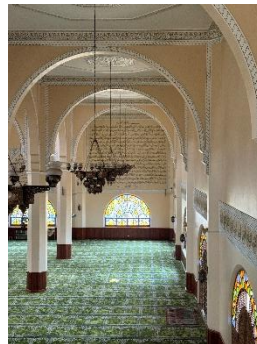
- ・ カンパラ市内の国立モスクを訪問し、ガイドの方からモスクの歴史や礼拝の様子、イスラム教徒の生活習慣について説明を伺いました。併せて、内部の装飾を視察し、ミナレットに登って市内を一望しました。

《訪問先での感想》

- ・ モスクを訪問し、宗教が地域社会に深く根付いていることを実感しました。壮麗な建築に感動するとともに、礼拝や生活習慣が人々の価値観に与える影響についてもっと学びたいと感じました。



UWEC のハシビロコウ



美しいモスク内部

1日を通して

UWEC の動物保護の取り組みや、国立モスクで学んだ宗教文化の理解は、多様性や共生の大切さを伝える題材になると思いました。授業では、環境保護や異文化理解をテーマに、生徒に考えさせる活動に繋がられると感じました。

7/28(月) 日直:木村 昌司

ウガンダ国立作物資源研究所(NaCCRI)

《訪問先で行ったこと》

- ・ 専門家の宮本輝尚氏より、「ウガンダにおける農業の概要・持続的なコメ生産振興プロジェクト

(Eco-PRiDe)」について説明を頂いた後、研修員の方と意見交換を行いました。その後、稲作の圃場見学を行いました。

《訪問先での感想》

- ・ コメは他の穀物と比べて高価な価格で取引され、調理のしやすさ等からも、近年注目されているとのことでした。アフリカの他国からも視察が多くあり、アフリカの「食」を変え、人々の支えとなる存在になるのでは、と大いに期待が膨らみました。その一方で、ウガンダでは若者の農業離れも起きていると伺い、驚きました。

リーチアウト インコンジェル パリッシュ HIV/AIDS イニシアティブ訪問：瀬戸凌平隊員(コミュニティ開発)の活動視察

《訪問先で行ったこと》

- ・ 瀬戸隊員が、実際に活動されている農村地域を訪問させて頂きました。バナナ、トウモロコシ、コメ、サトウキビ、コーヒー豆栽培、牛・鶏飼育の様子その他、水汲みの現場、女性によるクラフト製作の様子など見学させて頂きました。

《訪問先での感想》

- ・ 瀬戸隊員は、現地のコミュニティに深くかかわっておられ、農家の方から厚い信頼を受けている様子が印象に残っています。また、クラフト制作は所得向上につながり、家畜を購入することができ、生活水準も上がっているとの事でした。その一方で、「まとまった現金を手にするですぐに使ってしまう」など課題もあるようです。



NaCCRI の圃場にて



色とりどりのクラフト

1日を通して

ウガンダでは稲作栽培の普及が進みつつあり、日本のこれまで培ってきた技術を伝えることができ、日本の果たすべき役割は大いにあります。また農村地域では、上下水道は完備されておらず、日々の生活に水汲みは欠かせません。大きな重労働となります。

7/29(火) 日直:佐川 明日香

あしながウガンダ 心塾

《訪問先で行ったこと》

- ・ あしながウガンダ心塾にて、アフリカ中から選抜されたもうじき日本に留学する学生から専門分野や”my 志”を伺いました。またグループセッションでは、日本で具体的にどのようなことを学び自国へ貢献したいかや日本の文化について、インタビューを行いました。

《訪問先での感想》

- ・ 各参加者がそれぞれの国を代表して選ばれた生徒であることもあり、留学に対する強い熱意がひしひしと伝わってきました。また、参加者の専門分野が特定の領域に偏ることなく、農業、IT、女性の権利問題など、非常に幅広い分野にわたって学んでいる点にも大変驚かされました。

あしながウガンダ レインボーハウス・寺子屋

《訪問先で行ったこと》

- ・ あしながウガンダ事務所を訪問し、ウガンダ事業創設者の岡崎さんより、あしながウガンダの設立経緯や支援活動の概要についてお話を伺いました。また、レインボーハウスにて Primary 1~5 の子どもたちとの交流授業を実施したほか、寺子屋の施設見学も行いました。

《訪問先での感想》

- ・ 現在の事業内容に加え、あしなが育英会がなぜウガンダで活動を始めたのか、またどのようにして事業を拡大してきたのかについても伺うことができ、活動への理解が一層深まりました。交流授業では、日本の文化を紹介したり、子供たちと一緒に踊ったりする機会があり、彼らの屈託のない笑顔に触れられたことが印象的でした。



心塾の学生と



レインボーハウスの子どもたちとうちわ作り

メンデカレマ小学校:浦田萌子隊員(小学校教育)の活動視察

《訪問先で行ったこと》

- ・ メンデカレマ小学校では、校長先生および JICA 海外協力隊の浦田隊員より、学校の現状や現地での生活を通じて感じたことなどについてお話を伺いました。また、浦田隊員が担当されている P4 (4年生)クラスの児童たちと交流授業を行い、日本文化の紹介やダンスなどを通じて、楽しいひとときを共有しました。

《訪問先での感想》

- ・ 浦田隊員の笑顔からは、現地での活動の充実が伝わってきました。また、児童たちは私たちや日本文化に強い関心を示してくれて楽しく交流をすることができました。一方で、校内には電気が通っていないったりトイレの設備が十分でなかったりと、ウガンダの学校が抱える課題も実際に目の当たりにしました。



元気いっぱい子どもたちとソーラン節

1日を通して

教育の重要性を改めて痛感した一日でした。現地の児童数名にインタビューしたところ、好きなことはサッカーや友達と話すことで日本の子どもと変わらない様子でした。一方で、多くが医者や教師など、誰かの役に立ちたいという将来の夢を持っており、その思いに心を打たれました。

7/30(水) 日直:遠藤 いさみ

JICA ウガンダ事務所報告会

《訪問先で行ったこと》

- ・ JICA ウガンダ事務所にて、約 10 日間の研修で学んだことや帰国後、各学校で児童生徒たちに伝えたいことや授業で取り組みたいことについて、ウガンダ事務所の方々に報告をしました。

《訪問先での感想》

- ・ 今回の研修の中で、多数の訪問先で学んだことをウガンダ事務所の方に直接報告することで感謝の気持ちを伝えることができましたと思います。研修に参加した先生方が学んだことをまとめ、授業に生かしたいことを共有することで、帰国後の授業実践を行う上でのヒントを多く得ることができました。

伴企画調査員(安全管理)インタビュー

《訪問先で行ったこと》

- ・ ウガンダ事務所にて伴さんにお話を聞きました。今までのご経歴、ウガンダ事務所勤務するに至るまで詳しくお話を聞くことができました。また、大統領選挙が終わるまでの危機感が伝わり今後のウガンダの情勢についてもご意見を伺うことができました。

《訪問先での感想》

- ・ 初日ウガンダ事務所で、安全対策についてお話していただき危機意識を持って安全な研修となりました。元警察官というご経歴があり、ウガンダでも経験を活かし様々な安全対策に取り組んでいました。大統領選挙の結果次第で、平和なウガンダが今後どのような情勢になるのか、関心を持ちました。



報告会

1日を通して

研修を通して学んだことを発表する時間を設けていただいたことで、様々な校種の先生方が授業を通して生徒たちに伝えたいことについて幅広い視点から意見を聞くことができました。帰国後の授業で、JICA 海外協力隊についてや国際理解への興味関心が広がる授業内容を検討していきたいと思います。

交流授業案の概要

●チャングワリ中等教育校

全身で日本の文化を体感しよう！

実践者	遠藤いさみ、木村昌司、倉沢美穂、坂入晃、佐川明日香、滝本大翔、廣瀬愛、宮本渚、諸星智慶		
実践場所	チャングワリ中等教育校	時間	30分
対象	S3 クラス(200人以上)	実践教科	音楽、体育
ねらい	・日本の踊りやあそびを体験する活動を通し、価値観や生活している場所に異なる点があっても、共に楽しんだり、笑い合ったりできることに気づき、異文化理解を深めることができる。		
実践内容	時間(分)	方法・内容	使用教材
	3	1. あいさつ、導入(宮本) 現地の言葉で順番にあいさつと自己紹介をする。	充電式スピーカー 音源データ 法被・鉢巻
	15	2. ソーラン節(佐川) 初めにこの踊りの特徴を説明し、教員が一度お手本を見せる。 (時間があれば、有名な動きから少しずつレクチャーする) 一緒に踊る！	
	3	休憩(・移動)	
	6	【屋外が使える場合】 3. 大縄(坂入) いくつかのグループ(目安は30~40人ずつ)にわかれ、8の字跳びを教えたり一緒に跳んだりする。 (子どもの様子に応じて…一斉跳び・ダブルダッチ・よろよろへび・ゆうびんやさん など) 【屋外が使えない場合】 3. 日本の遊び歌(坂入) どんな内容の歌なのかを説明した後、教師が動きを付けながら歌う。その後、教師の歌に合わせて児童と共に動きを付ける。歌えそうな児童と一緒に歌ってほしいことを伝える。 ① 大きな栗の木の下で / 幸せなら手をたたこう ② グーチョキパーでなにつくろう ③ アルプス一万尺	長縄6~7本
3	4. お礼の挨拶(宮本)	充電式スピーカー 音源データ	

《成果》(原文)

- ・ 大縄跳びの授業を通して、現地の生徒たちが協力し合いながら楽しむ姿を見ることができた。また、日本の伝統的なソーラン節と一緒に踊ることで、体を動かす楽しさと日本文化を体験してもらえた。生徒たちは笑顔で積極的に参加してくれ、交流が深まった。
- ・ とても反応が良く、言葉の壁を越えてソーラン節を楽しんでくれた。
- ・ 身体を動かすアクティビティを選びましたが、子どもたちは大いに盛り上がり、大成功だったと思いま

- す。
- 「ソーラン節」を通して、踊ること、歌うことの楽しさはウガンダでも同じであることがわかった。大縄跳びは難しいルールの説明なく、皆で楽しめた。
- 日本の学校に戻ってきてから、自分がチャングワリの生徒さんとソーラン節を踊る写真を見せることで大きく喜んでくれた。日本の児童が体育の表現運動の発表テーマに「ソーラン節」を選び、休み時間に共に練習する時間ができた。
- 現地では短い時間ながらも楽しく交流することができました。特にソーラン節を通じて、言葉に頼らないコミュニケーションを体験でき、心と心が通い合うような一体感を得ることができました。
- 1回目にソーラン節を踊るときから一緒に踊ってくれる子たちもあり、私たちの授業に興味をもってくれたのだと感じた。また、みんなでソーラン節を踊ったり、一緒に長縄を跳んだりしたことで、子どもたちと一体となって授業を行うことができた。
- 難民居住区の生徒たちということから、どんな背景の生徒たちがいて、どんな雰囲気の子供たちなのかと身構えて行ったが、学びに向かう姿や生徒同士の関わり方など、日本の生徒と大きな違いはないのだと知れた。ソーラン節を通じて心を通わせた経験は忘れられない体験となった。
- 日本の学校に戻ってきてからの成果:女子寮の様子、井戸から水汲みをする様子を伝えた。
- 難民居住区の厳しい環境にいる子どもたちと、日本の生徒が言葉の壁を越えて、ソーラン節や縄跳びを通じて心を通わせることができました。交流を通じて、互いが同じ人間として深くつながっていることを実感しました。
- ダンスやスポーツ、歌や遊びは国を超えて交流できる素晴らしいものだと実感した。
- 自分たちと違う部分に目が行きがちだが、交流を通して同じものが好きだったり楽しいと感じたりすることで、自分たちと同じ部分にも気づけた。

《気づき》(原文)

- 帰国後、日本の生徒に報告したところ「自分たちの当たり前が世界では特別かもしれない」との気づきが多く聞かれ、国際理解の一步につながった。
- 見よう見まねで、ソーランを楽しんでくれた。「ソーラン」や「どっこいしょ」などすぐに覚えてくれた。日本語や日本の文化などなかなか触れることができない体験だったのではないかと思う。
- 子どもたちの適応力は素晴らしく、すぐにソーラン節の振付を覚えてしまい、感心させられました。心が通じたような気がしました。筋肉痛になりましたが、とても楽しい訪問となりました。
- 自己紹介で披露したけん玉に興味を持ってくれ、チャングワリの生徒さん側から進んで「けん玉」をやらせてほしいと申し出があった。
- 現地の言葉を覚えて自己紹介したところ、リアクションが大変大きかった。
- 子どもたちは非常にフレンドリーで、短い時間でもすぐに打ち解ける様子が印象的でした。日本の高校生であれば、海外からの訪問者に対してここまで盛り上がることは少ないかもしれないと感じました。一方で、シャイな子どもたちの姿も見られ、ウガンダの多様な国民性の一端に触れることができました。
- ソーラン節や長縄など、子どもたちと一緒に体を動かして活動することは、とてもよいコミュニケーションになることを改めて実感した。日本の子どもたちにも、言語や文化が違って、心を通わせることができることを伝えたい。また、現地の隊員さんから、週末に学校を訪れたときに、学生の方がソーラン節を口ずさんで、踊る様子を見たと同った。私たちの授業が少しでも子どもたちの心に残ったことをとても嬉しく思った。
- 難民居住区の生徒も、他の学校の生徒と変わりなかった。学校などで、生徒や教師がどのような努力をして、壁を感じているのかを知りたい。
- 幼い子をおんぶして登校する生徒の姿から、学校で勉強することの難しさや、その貴重さを改めて実感しました。また、現地の生徒の英語力が非常に高く、日本の生徒が書いた質問用紙に詳細な回答してくれたことで、日本の生徒は異文化への理解を深めることができました。
- 外での交流授業だったこともあり、ソーラン節や縄跳びをするにはぴったりのロケーションでした。これが室内だったら実施が難しいので、事前情報があったおかげで授業準備ができたと思います。



●あしながウガンダ

全身で日本の文化を体感しよう！

実践者	遠藤いさみ、木村昌司、倉沢美穂、坂入晃、佐川明日香、滝本大翔、廣瀬愛、宮本渚、諸星智慶		
実践場所	あしながウガンダ	時間	1時間20分(9:00~10:20)
対象	小学校1~5年生(100名)	実践教科	図画工作、体育
ねらい	・日本の文化や、踊りを体験する活動を通し、価値観や生活している場所に異なる点があっても、共に楽しむことができることに気づき、異文化理解を深めることができる。		
実践内容	時間(分)	方法・内容	使用教材
	5	【実施場所】 教室 9:00~ 1. あいさつ、導入(宮本) 現地の言葉で順番にあいさつと自己紹介をする。	うちわ カラーペン 筆ペン
	30	9:05~ 2. うちわづくり(倉沢) うちわの文化について説明した後、教師と日本の児童生徒からのプレゼントであることを伝え、現地の児童一人一人に渡す。次に、何もかかれていない片面に、現地の児童が自由に絵や文字を書き込む活動を行う。11人~12人でグループをつくり、教員が一人ずつ担当する。 教師は作成の様子を見ながら活動を認める声かけをしていく。	
	25	9:35~ 3. 児童の皆さんと一緒に朝食をいただく。 ・交流を行う ・インタビューをする	有線マイクとスピーカー(事務所よりお借りする) 充電式スピーカー 音源データ 法被・鉢巻
	10	【実施場所】 校庭 10:00~ 4. ソーラン節(佐川) ・初めにこの踊りの特徴を説明し、教員が一度お手本を見せる。(時間があれば、有名な動きから少しずつレクチャーする) ・一緒に踊る！	
10	10:10~ 5. お礼の挨拶・寄贈式(宮本)		

《成果》(原文)

- ・ 支援を受けながらも明るく前向きに学ぶ子どもたちの姿に触れ、教育支援の意義を実感した。また、彼らの「学びたい」という強い思いを感じ取ることができた。
- ・ うちわを喜んでくれた。P1にいた子どもは、アルファベットを書くことが難しいようであった。話すことはできるが、筆記の段階には個人差があると感じたが一生懸命に漢字をまねて書こうとしてくれた。
- ・ 私は墨汁と筆を持っていき、体験してもらいましたが、楽しく字を書いてくれ、ホッとしました。日本文化を味わってもらえたのではと思います。拙い英語でしたが、身振り手振りを交えれば、全く問題ありませんでした。
- ・ あしながウガンダの子はうちわに大変興味をもってくれた。たくさんの色のあるペンを持って行ったことにも喜んでくれた。

- ・ あしながウガンダの子がうちわの裏側にかいた絵が上手で、日本の子が描く絵と比較するような授業ができそうだった。迷うことなくどんどん描いていたことも印象深かった。
- ・ 日本の学校に戻ってきてから見せた、あしながウガンダの子が描いた絵の写真に日本の子はとても喜んでいて。一人のあしながウガンダの子が描いた、日本の国旗とウガンダの国旗が手をつないでいる様子に「friendship」と文字が添えられていた絵に特に歓声が上がり、拍手も起きた。
- ・ 現地では、うちわづくり体験やソーラン節の披露に加え、児童たちと軽食を共にする時間もありました。日本でも「同じ釜の飯を食う」という言葉があるように、食事を通して緊張がほぐれ、より良い関係を築くことができたように感じました。また、うちわづくりでは、日本の子どもたちからのメッセージに現地の児童たちが興味津々で耳を傾け、喜んでくれたことがとても印象的でした。
- ・ あしながウガンダの子どもたちが、日本の子どもたちが作ったうちわや折り紙をとても喜んでくれた。うちわ作りの活動にも積極的に取り組んでくれていた。あしながウガンダでも、子どもたちと踊るソーラン節はとても盛り上がった。チガンダダンスで私たちを迎えてくれた子どもたちと、ソーラン節を踊ることで、互いの文化の交流ができたと感じる。
- ・ あしながウガンダの子どもたちが折り紙の花を喜んでくれたことを伝えると、子どもたちもとても喜んでいて。また、チガンダダンスを子どもたちに見せると、マネして踊ってみたり、「どうやって踊るの?」聞いてきたりと、興味をもっている様子がうかがえた。
- ・ 現地での成果:ダンスで交流できたことがよかった。希望のダンスを生で見られたことはとても感慨深かった。あしながウガンダの歴史を生々の声、熱量で聞くことができ、私自身のキャリアを考えるきっかけにもなった。
- ・ 日本の学校に戻ってきてからの成果:奨学金でもお世話になっているあしなが育英会だが、アフリカでも活動をしていることを教員や生徒に伝えることができた。うちわ作りをした時の写真を見せて、アニメなどの絵や英語でのメッセージが喜ばれたことを伝えた。
- ・ 日本の生徒が描いたうちわにウガンダの生徒が興味を持ち、自分の名前を漢字で書きたいと自発的に学ぶ姿が見られました。
- ・ ウガンダの生徒が書いたうちわを見た日本の生徒は、自分たちの作品が海を渡って届けられたことに驚き、自分たちのうちわがどのように子どもたちに伝わったのかに強い関心を示しました。これは、国際協力の意義を深く考えるきっかけとなりました。
- ・ ソーラン節はここでも盛り上がった実感があります。うちわ作りは、「これらっていいの!? やったー!」と言ってくれる生徒ばかりで、こちらも嬉しかったです。しかし、日本の生徒たちに持ち帰られるような成果物もなにかつくれたら更に良かったかなと思いました。(参加教員のひとりが作って持って行っていた英語の質問シート?は、短時間でウガンダの子供達に答えてもらえるいいアイデアだと思いました。)

《気づき》(原文)

- ・ 報告を聞いた日本の生徒からは「自分も誰かの役に立ちたい」「寄付や支援の仕組みをもっと知りたい」といった声があがり、国際貢献について考えるきっかけとなった。
- ・ 「2つ目ももらっていいか?」と尋ねてくる子どももいたが、しっかり相手に確認してからもらう様子が見られて、日頃から人との関りについて教育を受けていると感じた。認定されてはいないが、本や教材は比較的充実しているのかと思った。
- ・ あしながウガンダの皆さんから披露して頂いた情熱的なダンスが忘れられません。また昨年を引き続き、ソーラン節を行ったことで、フレーズを覚えている生徒も多くいたことも印象に残っています。
- ・ あしながウガンダの子はこれまでに学んだ日本語を私に進んで披露してくれた。中には「こんな日本語まで知ってるの?」と思うような言葉もあって、どのように学んだのかが気になった。皆、日本語が上手だし、日本に興味がある様子がよく伝わった。
- ・ 事前には、親を亡くし、さらに開発途上国であるウガンダで育った子どもたちは、どこか暗い印象を持っているのではないかと想像していました。しかし、実際に会ってみるとその印象は大きく覆され、どの子どもも目を輝かせながら前向きに活動に取り組む姿がとても印象的でした。こうした先入観を持っていたことに気づかされ、自分自身の偏った見方を反省する機会にもなりました。
- ・ どこの国でも、子どもたちの笑顔はとてもすてきだと改めて実感した。
- ・ ダンスを通じた文化交流はとてもよい視点であった。今後、他国の学校とオンライン交流するときは、お互いにダンスを発表し合うのもよいと感じた。
- ・ あしながウガンダの子どもたちに、好きなものや将来の夢、日本の子どもたちへのメッセージなどを書いてもらった。それを日本の子どもたちと共有することで、遠い国にいる子どもたちも自分たちと

同じところもあるところに気付くことができればと思う。

- ・ あしながウガンダの子どもたちの中には、英語の指示やスペルが分からない子もいたため、寺子屋の先生にサポートしていただいたところもあった。もう少し準備をしておくべきだったと反省した。
- ・ あしながにいた子どもたちは、想像していたよりも手厚くサポートを受けている印象だった。個人的にはどこの子どもたちよりも人懐っこく感じ、もっとたくさん関わりたかったが、時間がなく残念だった。
- ・ 公立学校に通えない子どもたちへの教育支援「テラコヤ」が、生徒たちの学習意欲を支え、彼らが前向きに学んでいることを知りました。また、他の公立学校と比較して、支援が行き届いているためか、施設が充実している印象を受けました。
- ・ 私自身が英語ができないこともあり、教員1人あたりの子供の数が多く全員に目を配ることが難しかったです。生徒たちは日本語に興味を示してくれました。



●メンデカレマ小学校

全身で日本の文化を体感しよう！

実践者	遠藤いさみ、木村昌司、倉沢美穂、坂入晃、 佐川明日香、滝本大翔、廣瀬愛、宮本渚、諸星智慶		
実践場所	メンデカレマ小学校	時間	2時間(14:00~16:00)
対象	小学校3~4年生(68名)	実践教科	音楽、図画工作、体育
ねらい	・日本の文化や遊び、踊りを体験する活動を通し、価値観や生活している場所に異なる点があっても、共に楽しんだり、笑い合ったりできることに気付き、異文化理解を深めることができる。		
実践内容	時間 (分)	方法・内容	使用教材
	5	【実施場所】 P4 教室 14:00~ 1. あいさつ、導入(宮本) 現地の言葉で順番にあいさつと自己紹介をする。	
	20	14:05~ 2. 日本の遊び歌(坂入) どんな内容の歌なのかを説明した後、教師が動きを付けながら歌う。その後、教師の歌に合わせて児童と共に動きを付ける。歌えそうな児童と一緒に歌ってほしいことを伝える。 ① 大きな栗の木の下で / 幸せなら手をたたこう ② グーチョキパーでなにつくろう ③ アルプス一万尺	充電式スピーカ ー 音源データ
	30	14:25~ 3. うちわづくり(倉沢) うちわの文化について説明した後、教師と日本の児童生徒からのプレゼントであることを伝え、現地の児童一人一人に渡す。次に、何もかかれていない片面に、現地の児童が自由に絵や文字を書き込む活動を行う。7~8人でグループをつくり、教員が一人ずつ担当する。 教師は作成の様子を見ながら活動を認める声かけをしていく。	うちわ カラーペン 筆ペン
	10	休憩	
	20	15:00~ 4. 交流 ・インタビューをする ・日本の子どもへの質問を募集する ・日本の子どもたちに向けての制作 など	
	5	休憩・移動(グラウンドへ)	
	20	15:25~ 5. ソーラン節(佐川) 初めにこの踊りの特徴を説明し、教員が一度お手本を見せる。(時間があれば、有名な動きから少しずつレクチャーする) 一緒に踊る！	充電式スピーカ ー 音源データ 法被・鉢巻
	10	15:50~ 6. お礼の挨拶・寄贈式(宮本)	

《成果》(原文)

- ・ 日本の遊びや歌を紹介すると、現地の子どもたちが笑顔で一緒に楽しんでくれ、文化交流を実感できた。言葉が十分に通じなくても、体験を共有することで心がつながった。
- ・ 手遊び歌をととても楽しんでくれた。子どもと関わる時間が多くあったので、将来の夢や好きな勉強、日本の学校についても楽しく話すことができた。特に食べ物にはとても興味をもっていた。うちわ作りも意欲的に取り組んでくれた。
- ・ あしながウガンダと同様のプログラム(うちわ作成・ソーラン節)に加え、時間もややあったので、手遊び歌、生徒と交流の時間も長く持てました。あしながウガンダに続き2回目ということもあり、丁寧に教えることもでき、うちわの完成度も高くなったと思います。
- ・ うちわやけん玉に大変興味をもってくれ、子どもそっちのけで大人の先生達が遊ぶ姿が印象的だった。
- ・ 遊び歌は、練習してきたパターンと違う曲が流れるというハプニングがあり、より動きが難しいバージョンになった。しかし、それによってよりメンデカレマの子ども達の楽しそうな姿や豊かな表情を見ることができたように思う。身体を動かす遊びの楽しさはウガンダでも共通であり、その順応の速さにも驚いた。
- ・ 現地では、地元小学校の雰囲気を感じることができました。うちわづくりやソーラン節の交流に加え、インタビューを通して子どもたちの素顔に触れる機会もありました。特に印象的だったのは、将来の夢を尋ねた際に「医者」や「先生」と答える児童が多く、人々を助けたい、社会の役に立ちたいという強い思いが感じられたことです。
- ・ メンデカレマ小学校の子どもたちも、日本の子どもたちが作ったうちわや折り紙をととても喜んでくれたし、うちわ作りの活動にも積極的に取り組んでくれていた。漢字に興味をもつ子が多く、一生懸命マネして漢字を書く姿が印象的だった。日本の文化を少しでも伝えられたと感じる。また、メンデカレマ小学校でも、子どもたちと踊るソーラン節はとても盛り上がった。
- ・ メンデカレマ小学校の子どもたちが折り紙のメダルを喜んでくれたことを伝え、子どもたちもととても喜んでくれた。
- ・ 現地での成果:多くの生徒を相手に授業をすることの難しさを感じた。現地の教員が生徒をまとめる力がすごいと感じた。
- ・ 日本の学校に戻ってきてからの成果:うちわ作りをした時の写真を見せて、アニメなどの絵や英語でのメッセージが喜ばれたことを伝えた。
- ・ 浦田隊員が活動する学校全体が日本文化に強い関心を持っており、交流活動に意欲的に取り組んでくれました。日本語や日本文化への関心の高さが伺える、非常に活気ある交流となりました。
- ・ うちわ作りや日本語にととても興味をもってくれました。現地での写真を日本の生徒達に見せたと、自分が作成したうちわがこの子の手元に渡ったんだ、ということで遠い国とのつながりを感じてくれたようでした。

《気づき》(原文)

- ・ 「言葉が通じなくても気持ちは伝わる」という体験を日本の生徒に伝え、「自分たちも海外の人と交流してみたい」という声が出て、交流への意欲を高めることができた。
- ・ 日本の文化に興味をもってたくさん質問してくれた。一人一人に将来の夢が明確にあり、日本にいる子ども以上に学校に行くことや勉強できることに感謝し、一生懸命に取り組む姿がととても印象的だった。
- ・ メンデカレマ小学校は浦田さんが隊員として活動されている学校で、小学校の先生方がとても歓迎してくれたことが印象に残っています。授業では私の予習不足もあり、折り紙作成がうまくできなかったことが心残りですが、熱心に取り組んでくれ、嬉しかったです。
- ・ うちわを作った日本の子ども達の写真を見せるため、写真を印刷していった。「この子達にメッセージを書いてほしい。」とお願いしたが、うまく伝わらず、メッセージには自分の名前やうちわに書かれた漢字を真似て書くウガンダの子がほとんどだった。もっと現地の言葉を調べて準備しておきたかった。
- ・ ウガンダの児童たちには、日本の児童と共通する面もあれば、異なる面もあることが分かりました。学校が好きで、友達との会話やスポーツを楽しむ様子は、日本の児童と変わりません。一方で、学びに対する情熱はウガンダの児童のほうが強いように感じました。自らを取り巻く厳しい環境を変えようと、勉強に真剣に取り組む姿が印象的でした。
- ・ メンデカレマ小学校でも、子どもたちに、好きなものや将来の夢、日本の子どもたちへのメッセージなどを書いてもらった。それを日本の子どもたちと共有することで、遠い国にいる子どもたちも自分たちと同じところもあるところに気付くことができればと思う。

- ・ 現地の先生方や子どもたちが、授業が終わった後も、ソーラン節のフレーズを口ずさんでいた。私たちの授業で、子どもたちの心に響くものがあったのかなと思う。
- ・ 他の学年の子どもたちもとても興味をもって来ていたので、折り紙やうちわをもっと多めに用意していてもよかったと思った。
- ・ 普段の高校生と違い、大人数の小学生を相手にした授業はわからないことが多く、小学校の先生方が心強かった。
- ・ どの生徒も授業に前向きで驚いた。
- ・ 「絵を描いてください」と伝えても、絵を描くことに慣れていないためか、文字を真似る子どもが多かったです。これは、単に美術教育の機会が少ないのか、それとも日本語への関心が高いからなのか、さらに深く探求する必要があると感じました。
- ・ ムスリムとはいえど、男女で分けることなどは年齢が低い子達にはないのだと知りました。
- ・ ウガンダの先生達は給料の低さに困っているようでした。
- ・ 浦田さんの明るさは本当に素晴らしく、現地で受け入れられている様子が伝わってきました。



海外研修報告書より

参加者提出の「海外研修報告書」より抜粋(2025年8月末時点・原文・記入者名なし・1名ずつ掲載)

1. 海外研修に対する個人目標とその達成度

今回の海外研修の個人目標は、国際協力や異文化理解の視点を深め、教育現場で児童・生徒に伝えられる学びを得ることでした。特に、途上国におけるインフラ整備や教育支援の現状を自分の目で見ることを重視しました。実際に交通管制センターや難民支援団体、あしながウガンダなどを訪問し、現場の課題と日本・国際社会の取り組みを理解できたため、目標は十分に達成できたと感じています。

2. 訪問先から学んだこと(気づいたこと、学んだこと、感動したことなど)

- ・ 交通管制センター・日本製信号・カンパラフライオーバー:都市部の交通渋滞対策に日本の技術が活用されており、国際協力の成果を実際に目にできた。
- ・ ホイマ・メンデカレマ:都市と地方の格差を体感し、教育や生活環境の違いを実感した。
- ・ 難民を守る会:難民支援の現場で、教育や生活再建の重要性、そして人道支援の持続的な仕組みの必要性を学んだ。
- ・ モスク:イスラム文化とカンパラの多宗教共生のあり方を知り、宗教理解の重要性を感じた。
- ・ クラフトマーケット:地域文化と伝統工芸の価値を学び、観光や地場産業による経済活性化の一端を知った。
- ・ エンテベ動物園:密猟防止や動物保護活動がSDGsと密接に関連しており、環境教育の重要性を再認識した。
- ・ あしながウガンダ:遺児や貧困家庭の子どもたちへの教育支援活動を知り、未来を切り開く教育の力を実感した。

3. 現地研修の経験を活かす授業実践への意欲やねらい(授業・学校生活への活用)

- ・ 国際理解教育:写真や体験談を用いて、ウガンダの生活、文化、国際協力を紹介する授業。
- ・ SDGs学習:動物保護や難民支援、教育支援を事例に取り上げ、生徒が自分たちにできる国際貢献を考える活動。
- ・ 英語教育:研修中に実際に使った英語表現や現地の人との交流エピソードを授業で共有し、英語学習の意義を伝える。

4. JICAの国際協力事業の「良い!と思ったところ」と「今後あるといいなと思う視点」

- ・ 良いところ:インフラ整備から教育支援まで幅広い分野で、現地のニーズに合わせた協力を行っている点。現地スタッフと日本の専門家が連携して持続的な支援をしている点。
- ・ 今後あるといい視点:教育現場に直接関わる支援をさらに充実させ、日本の学校との交流やオンライン授業など双方向の学びを取り入れてほしい。

5. ここまでの研修に対して「良い!と思ったところ」と「今後あるといいなと思う視点」

- ・ 良いところ:現場を直接訪問し、多様な団体の取り組みを知ることで、机上の知識では得られないリアルな学びが得られた。
- ・ 今後あるといい視点:訪問先でのディスカッションや現地教師との交流の時間を増やすことで、教育者同士の意見交換がさらに深まると思う。

6. その他全般を通じての感想・意見など

初めてアフリカの地を訪れ、日常の価値観が大きく変わった。特に、困難な状況にあっても希望を持ち、互いに助け合う人々の姿に心を打たれた。教育は国を変える力を持つと改めて実感した。

1. 海外研修に対する個人目標とその達成度

「ウガンダという国で自分の目で見て考えたことを、日本の生徒に伝えたい。」
直面している課題に対してどのように取り組んでいるのか、どのような好転や障壁があるのか、インターネット上ではなく、自らの目で見て感じることにこの研修に参加する意味があると考えました。肌感として、現在、私が担当している日本の生徒たちは、問題に対して最適解をすぐに見つけて、その他の選択肢や少しでも遠回りになることは、すぐに無駄なことだと決めつけてしまうような風潮を感じていました。

研修に参加する中で、ウガンダの問題を解決しようと、もやもやしながら試行錯誤を繰り返している方々と出会い、私の生徒に対して、問題に対してどのような姿勢で向き合うべきなのかを伝えたいという思いが強くなりました。共に研修に参加した方たちともやもや考えたことを、今度は生徒と一緒にともやもや考えていきたいと思っています。

2. 訪問先から学んだこと(気づいたこと、学んだこと、感動したことなど)

一番の気づきは、「大きな課題は、小規模の集団が動くだけでは解決しにくい」ということでした。どの事業や団体も、周囲の人や集団を巻き込みながら課題に向かっていると感じました。閉じたコミュニティの中だけの力での課題解決では、いつかは行き詰ってしまうので、私(や生徒)自身が閉じた壁の風穴を開けるような存在でありたい(になってほしい)と思います。

また、現地の方のホスピタリティや、子どもたちの笑顔とエネルギーに驚かされました。若者が多いウガンダの持つエネルギーは、これからの成長の大きな原動力だと感じました。

3. 現地研修の経験を活かす授業実践への意欲やねらい(授業・学校生活への活用)

日本で、「ウガンダに行ってくるよ！(行ってきたよ!）」という話をすると、生徒を含め、ほとんどの人が良く知らず、間違った偏見を言われて悲しくなることが多かったです。(私も始めはよく知らなかった一人でしたが。)そんなウガンダだからこそ、新しく知らないことと出会う、という経験をするにはピッタリだと思ってワクワクしています。教師の性かもしれません。

授業でウガンダの様々なことについて取り扱うにあたって、知らないことに対する出会い方については一番気を付けていかなければならないと考えています。「貧しくてかわいそう」、「自分たちは恵まれているのだから感謝しなければ」のような、マイナス方向からだけの出会い方にはならないように気を付けたいです。

4. JICA の国際協力事業の「良い！と思ったところ」と「今後あるといいなと思う視点」

様々な協力のやり方がある中で、そのバランスが素晴らしいなと感じました。無限の資金があれば、すべての環境を整えることは可能かもしれませんが、現地の方たちが自身の力で歩いていくことが大切で、人材育成に力を入れている点に感動しました。

成長に必要な不可欠なインフラなどは無償資金協力、ともに作り上げられるところは現地の方と作り、環境にも配慮しながら、などの色々な要素のバランスを見て、国際協力をしている印象を受けました。

5. ここまでの研修に対して「良い！と思ったところ」と「今後あるといいなと思う視点」

十分すぎるほどに、JICA など関係者の方々が研修の土台作りをしてくださり、どれだけ感謝してもしきれません。おかげさまで、盛りだくさんの研修内容で、頭の中が散らかることなく研修を進めることができました。

6. その他全般を通じての感想・意見など

準備をする時間がなかなか十分に取れなかったが、おすすめされたウガンダの本を読み、予備知識を入れていけたことが、研修中の理解にかなり役立ちました。また、様々な校種、教科の先生方、記者の方々、企画運営の方々と出会い、いろんな視点を得ながら研修を進められたことも大変ありがたかったです。

また、英語科の先生方や運営の方が、英語でコミュニケーションをとっている姿を見て、ありがたいなと思うと同時に、うらやましかったです。英語や現地の言葉を覚えたいというモチベーションがかなり高

まりました。とりあえず、Duolingoのアプリを入れて勉強し始めました。

研修中は、端々で教育が持っている力を感じるとともに、教育を仕事にしていることへの誇りを感じました。これからも教育を通して人と関わっていきたいと思います。

1. 海外研修に対する個人目標とその達成度

海外研修に参加するにあたり、「国際」や「海外」という言葉を自分とは無関係だと捉える生徒たちの意識を編み、視野を広げたいと強く願っていました。多様な文化や人々に興味を持たせ、国際的な課題を「自分ごと」として捉え、行動できる生徒を育てることが目標でした。そのために、私自身が現地で開発途上国の現状やJICAの活動を肌で感じ、生徒たちに伝えるためのきっかけを持ち帰ろうと考えたのです。

実際にウガンダで支援の現場を体験し、現地の人々と直接触れ合う中で、国や環境が違って、誰もが日々の暮らしを楽しみ、懸命に生きている姿に感銘を受けました。この経験を通して、文化や境遇を超えて、人として共通の強さや温かさがあることを再確認できました。この貴重な学びをどう授業に活かすか、具体的なプランはまだ模索中ですが、持ち帰った豊富なエピソードや資料を最大限に活用し、研修の目標達成に努めていきたいです。

2. 訪問先から学んだこと(気づいたこと、学んだこと、感動したことなど)

- ・ 難民問題
ウガンダの「オープンドア政策」には深く考えさせられました。難民に土地や就労、教育、医療の機会を与えることで社会への統合を進めるその寛容な姿勢には感銘を受けました。しかし、一方で、支援を受けることが当たり前になってしまう「支援慣れ」の現状や、難民が減らないという課題を目の当たりにし、「このままでいいのだろうか」という複雑な思いも残りました。この寛容さの背景に、国境を越えた歴史的なつながりや共通の部族意識があることにも気づかされました。
- ・ 現地の子どもたちとの交流
訪問した学校で出会った子どもたちの、屈託のない笑顔が忘れられません。厳しい環境の中でも、学校生活を楽しんでいる彼らの姿に、教育や学校の本当の大切さを教えられました。一緒に遊び、歌い、何気ない会話を笑顔で交わした時間はとても温かいものでした。私たちが帰る際には、どこまでも追いかけてきてくれた姿に胸が熱くなりました。また、ソーラン節を一緒に踊ったり、うちわを一緒に作ったりできたことは、アフリカの地で日本の文化を通じて交流できた素敵な経験になりました。
- ・ 日本人専門家の活躍
JICA隊員や各分野の専門家の方々が、ウガンダの地で献身的に活動している姿は、本当に素晴らしいものでした。インフラ、農業、教育など、多岐にわたる分野で、自分の力を誰かのために惜しみなく注ぐ姿はとてもカッコよく、日本とウガンダの深いつながりを再認識する機会となりました。

3. 現地研修の経験を活かす授業実践への意欲やねらい(授業・学校生活への活用)

今回の研修で得た経験を、単なる情報共有で終わらせず、生徒の学びへとつなげるべく、今後の授業と学校生活に活かしていきたいと考えています。

- ・ 国際交流活動: 現地の子どもたちと作ったうちわや、日本の生徒の質問に答えてくれたワークシート、写真や動画を「生きた教材」として活用します。これにより、ウガンダとのつながりを実感させ、オンラインでの交流授業を通じてリアルな学びを体験させたいと考えています。
- ・ 校内掲示: ウガンダの風景や人々の写真、研修内容をまとめた掲示物を作成し、全校生徒が日常的に国際理解に触れられる環境を整えます。

これらの活動を通じて、生徒たちが国際的な視点を持ち、未来に向けて自ら行動できる力を育むことを目指します。具体的な授業プランについては、生徒が「自分ごと」として考え、主体的に学べるようなアプローチを現在構想中です。

4. JICAの国際協力事業の「良い!と思ったところ」と「今後あるといいなと思う視点」

- ・ JICAの国際協力事業の「良い!と思ったところ」
JICAの協力事業は、現地の人々が主体的に関わり、自立していくことを支える姿勢が素晴らしいと

感じました。また、農業、教育など様々な分野で専門家が活躍し、日本の協力の質の高さを感じさせます。

- ・ 今後あるといいなと思う視点

研修で得た学びを持続させるには、教員自身の積極的な行動が重要です。多くの教員がJICAの教育支援プログラムを知らないため、それらが各学校で活用されるような普及に向けた具体的なサポートがあればと思います。

5. ここまでの研修に対して「良い！と思ったところ」と「今後あるといいなと思う視点」

- ・ 良い！と思ったところ

研修のカリキュラムが大変よく練られており、多岐にわたる分野を視察できたことで、自身の視野を大きく広げることができました。また、参加者一人ひとりに寄り添い、多くの気づきを与えようとする運営の方々の手厚いサポートと温かい配慮を随所で感じ、安心して研修に集中できたことに心から感謝しています。

- ・ 今後あるといいなと思う視点

今回の研修は大変貴重な機会でしたが、もし可能であれば、医療分野の視察もできるとよかったです。

6. その他全般を通じての感想・意見など

今回の研修は、私にとって非常に貴重な経験となりました。運営の方々から教員という立場を尊重し、周到な準備と手厚いサポートをしてくださったことに、心から感謝しています。多岐にわたる視察を通して、難民支援やインフラ整備、教育といった分野で、ウガンダと日本の間には多くのつながりがあることを知りました。そして、国や文化が違っていても、人々の温かさや笑顔は共通していることを実感し、遠い存在だったウガンダが、今では身近な国に感じられます。この経験を通して、生徒たちの国際理解教育を推進することが、未来を担う子どもたちの視野を広げ、人と国をつなぐ大切な役割であることを学びました。研修でいただいたこの思いを、今後も継続して伝えていきたいと考えています。ありがとうございました。

1. 海外研修に対する個人目標とその達成度

特別支援学校の生徒はなかなか海外に行くことができない。しかし、ALTとの交流や他国に関する興味は高いと感じる。生徒たちに自分の知らない新しい世界の生活や文化について伝えるために、教師海外研修を通してウガンダで自身の国際理解に関する知識を深め、たくさんの教材収集ができた。

2. 訪問先から学んだこと(気づいたこと、学んだこと、感動したことなど)

難民居住地やあしながとの子ども達との交流できたことがとても印象的だった。教科書やノート、学習環境など限られたものの中でも勉強に向かう姿に感動した。食べるものがあること、水や食事がすぐに手に入るなど全てのことに関して当たり前ではないからこそ、学校や友達、家族に対する思いもとても大切にしていると気付くことができた。

3. 現地研修の経験を活かす授業実践への意欲やねらい(授業・学校生活への活用)

特別支援学校の生徒たちが新しい世界を知るきっかけとなる授業を行いたい。ウガンダを知り、ウガンダをきっかけに世界に興味を広げられるように意識した教材を準備する。また、国旗や世界地図でウガンダがどこにあるのか、現地での暮らし、食事、文化など日本との違いや共通点について気付くことができるよう工夫していく。同僚には、研修を通して気付いた途上国の学校の様子や教育の重要性、ウガンダのよさを伝えていきたい。そして、授業実践での生徒たちの反応を伝え、今後の特別支援学校における国際理解学習の推進に携わっていきたい。

4. JICAの国際協力事業の「良い！と思ったところ」と「今後あるといいなと思う視点」

技術協力や有償支援協力、無償支援協力があり、途上国の特性や課題に合わせて幅広い分野から支援協力を行っていること。常に変わりゆく世界情勢の中で、様々な変化に柔軟に対応しながら途上国の発

展を進め、今困っている人が少しでも平和で安全に笑顔で過ごす世界になるといいなと思う。

5. ここまでの研修に対して「良い！と思ったところ」と「今後あるといいなと思う視点」

本研修では教育現場だけではなく、幅広い分野からプログラムを計画してくれたので自分自身の知見を広げることができたのがよかった。技術が発展し人々の生活が豊かになるが、変わらず残して守り続けていくべきことも実はあるのではないかと思う。現地で暮らす人の心に寄り添いながら、様々な価値観や多様性を認め柔軟な視点で共に考えていくべきだと感じた。

6. その他全般を通じての感想・意見など

初めての海外で不安もありましたが、同じ教育現場で働く先生やたくさんの知識をもった運営の皆さんがいてくださりとても心強かったです。国際理解に関して知識が少なかったので、今回の研修を通してたくさんの学びを得ることができました。とても貴重な経験をする事ができ、かけがえのない時間を過ごすことができたことに感謝しています。生徒や同僚はもちろん、家族にも今回の経験を伝え教員以外の立場としても国際理解に関心をもち続け、自分にできることは何か今後も考えて行動していきたいです。

1. 海外研修に対する個人目標とその達成度

○視野を広げたり、多様な考え方に対する理解をより一層深めたりしながら、文化や価値観が異なる環境の中でウガンダの方々が大切にしているものを知り、日本とウガンダのつながりや日本人だからこそできることは何かを学ぶ。

→ウガンダ共和国での現地研修を通して、教育現場だけでなく、インフラ整備、農業、難民支援、自然保護など、JICAの事業に関連する多岐に渡る分野の視察をさせていただいたことで、これまであまり関わる機会がなかった分野についても学ぶことができた。そして、それぞれの視察先では、その事業に関わる日本人の方、現地の方、JICA職員の方など、それぞれの立場からの話を伺うことができ、多角的に物事を考えることができた。また、毎日の振り返りの時間では、その日の学んだことや感じたことなどを研修に参加した教員、運営間で共有したり、話し合ったりすることで、自分だけでは気付かなかった視点をもつことができ、さらに理解を深めることができた。このように多面的にウガンダを見たり、様々な視点から多角的に一つの課題について考えたりすることで、自分自身の視野を広げたり、多様な考え方に対する理解をより一層深めたりすることができたと感じる。そして、様々な立場の方々から話を伺うことができたことで、ほんの少しではあるが、ウガンダで暮らす方々が大切にしているものを知ることができたのではないと思う。さらに、たくさんの場面で日本とウガンダのつながりを実感することができ、子どもたちにも伝えていきたいと感じた。しかし、日本人だからこそできることについては、課題によっては難しく、答えがでないものもある。これについては、これから子どもたちと考える機会を意図的に設け、自分自身も考えを深め、国際社会で生きる一員として、自分自身にできることを実践していきたい。【達成度80%】

○短い期間の中でたくさんのことを吸収するために、現地の方々と積極的にコミュニケーションをとったり、様々なことに挑戦したりする。

→現地の方々に限らず、今回の研修で関わった方々と積極的にコミュニケーションをとり、様々な話をすることで、たくさんの気付きを得ることができた。また、現地に行ったからこそできる体験がたくさんあり、実際に多くのもの・ことを見たり、ふれたり、感じたりすることができた。これらの自分の目で見たもの、自分自身が感じたことを、これからの授業に生かしていきたい。【達成度90%】

2. 訪問先から学んだこと(気づいたこと、学んだこと、感動したことなど)

- ・ 教師海外研修に参加する前は、ウガンダ共和国がアフリカ大陸のどこにあるのも分かっておらず、アフリカにある国というだけで、ステレオタイプな見方をしていた。しかし、現地に行ってみると、いい意味でその価値観を裏切られた。現地に行き、自分の目で見たり、体験したりすることで、ウガンダのよさを肌で感じた。また、様々な場面で日本とウガンダのつながりを感じ、今まで意識していなかった国から、自分にとって身近な国となった。

- ・「教育」の大切さを改めて感じた。様々な視察先で、ウガンダにおける課題を知り、どうすればよいのかを考えると、結局「教育が大事だ」となることも多かった。日本の教育の力を改めて感じるとともに、学校教育はとても重要な役割を担っていると感じた。そのため、子どもたちにただ知識や技能を「教える」のではなく、それらをどのように活用するか、課題をどう解決していくか、「生きる力」となるようにしていきたい。
- ・子どもたちの笑顔はどこでも同じだということ。今回は3校で交流授業をさせていただいたが、子どもたちは私たちのことを受け入れ、とても楽しそうに授業を受けてくれた。特に、一緒に踊った「ソーラン節」は、子どもたちとの一体感が生まれ、とても心に残るものとなった。また、難民居住区で暮らす女の子は、「学校に行っている時間が幸せ」だと言っていた。家庭の事情で学校に行けない日もあるようだが、彼女にとっては、学校が「楽しい」場所であり、「安心できる」場所なのだろう。勤務校でも、学校が子どもたちにとって「楽しく」「安心・安全」な場所となるよう努めていきたい。
- ・現地で働く方々の熱い思いを強く感じた。きちんと目的意識をもっており、そこに向かって試行錯誤しながら一生懸命活動する姿が素敵だと思った。特に協力隊の方々は、「これがいい」と言っても現地の方にはなかなか受け入れてもらえないという現実を教えてくださいました。現地の人からすれば、その土地で何年も受け継がれてきたものを知らない日本人に言われてもそう簡単には変えられないという思いがある。そのような中でも、積極的に現地の方々に関わり、信頼を得ることで、少しずつ受け入れてもらうことができるのだと思った。

3. 現地研修の経験を活かす授業実践への意欲やねらい(授業・学校生活への活用)

子どもたちの発達段階に応じた国際理解教育の授業を実現したい。まずは、どの学年でも子どもたちが日本にいても世界とつながっているということを実感できるようにしたい。そして、小学校低学年では、ウガンダ共和国を通して、他国の人々や文化に親しみを持ち、自分たちと異なる文化のよさに気付いて、積極的にかかわりをもとうとするような態度を育てていきたい。小学校高学年では、相手の文化を受け入れ、互いの文化を尊重しながら、進んで他国の人とつながったり、国際親善に努めたりしようとする態度を育てていきたい。そのためにも、日本とウガンダの生活や文化の共通点や相違点を見付けたり、子どもたちが自分事とし考えられるような課題を取り上げ、他国の人々と仲良くするために大切なことを考えていけたりするようにしたい。また、高学年では、国際協力のために自分たちにできることまで考えられるようにしたい。さらに、今回の授業を特別なものにせず、授業の様々な場面で子どもたちに考えるきっかけを与え、教科横断的に国際理解教育を行えるようにしたい。

4. JICA の国際協力事業の「良い！と思ったところ」と「今後あるといいなと思う視点」

これまでは、JICAが国際協力事業をしていることは知っていても、どのようなことをどのように行っているのかまでは知らなかった。本研修を通してJICAの国際協力事業のよさを知ることができた。

その中でも、「日本は魚をくれるのではなく、魚の釣り方を教えてくれる」という言葉が印象的だった。ただお金を出したり、ものをあげたり(つくってあげたり)するのではなく、日本の技術を教えるけどインフラ設備をつくるのは現地の人、現地に合わせた方法や現地でも使える道具の提案など、現地の人たちと共に事業であることがとてもよいと感じた。まさに「国づくりは 人づくり」であり、人材育成、現地の方々の自立を目的とした協力なのだと実感した。

5. ここまでの研修に対して「良い！と思ったところ」と「今後あるといいなと思う視点」

- ・教育のみならず幅広い分野について学ぶことができてよかった。これまであまり関わる機会のなかった分野もあったが、現地の方の丁寧な説明や実際に目にすることで理解が深まり、自分自身の知見や視野も広がった。そして、様々な面で、日本とウガンダのつながりを感じることができた。また、現地でたくさんの方々との交流できたことがとてもよかった。現地で働く日本人の方々、ウガンダ人の方々との話ができたことは、とても有意義で、そこから学ぶこともたくさんあった。
- ・事前研修が対面でもう1日あるとよかったと思う。もしくは、2週に分けて事前研修を行い、1日目に2日目に話し合うこと(交流授業案等)を伝え、2日目までに考えてくる。オンラインで事前に行えることは行い、対面の研修では話し合いの時間を確保する、などもできるのかなと思う。

6. その他全般を通じての感想・意見など

現地での研修は、とても貴重な経験となった。自分の目で見たり、体験したりすることで、ウガンダのよさを肌で感じ、様々な場面で日本とウガンダのつながりを感じることができた。この研修で学んだことを子どもたちに還元していきたい。また、本研修で多くの人とつながることができた。このご縁を大切に、これからの教育活動に生かしていきたい。

1. 海外研修に対する個人目標とその達成度

- ・ 日本で授業するための材料集めと授業構想・・・80%
たくさんの施設を訪れ、ウガンダの日常生活や文化はもちろん、農業やインフラ、難民支援など幅広い分野で自分の知見を広げたり写真を撮ったりすることができた。また、各施設では積極的に質問をすることで、自分の知りたい情報を聞くこともできた。授業の方向性は見えてきたが、具体的なプランまではまだ考えられていない。
- ・ 現地の人との交流を楽しむ・・・100%
ルガンダ語であいさつを試みたり英語で会話をしたりと、積極的にコミュニケーションをとれた。ウガンダの人々はやさしく、おもてなしの心が素晴らしかった。何よりも、笑顔が素敵で印象に残っている。

2. 訪問先から学んだこと(気づいたこと、学んだこと、感動したことなど)

- ・ 交流授業から・・・
子供たちの素直さ・純粋さに心打たれた。どの学校に行っても目をキラキラさせて、笑顔で私たちを歓迎してくれたのがとても印象に残っている。公用語にはなっているものの英語があまりわからない子もいたが、必死に私の英語を聞き取り、答えてくれた。また、よさこいソーランでは言葉なくとも心が繋がる瞬間を感じることができた。「学校が楽しい」と言う子どもが多く、友達と遊んだり勉強したりすることが好きな感覚は日本の子供たちと同じなんだな、と思った。それぞれの施設に通う子供たちは、難民や遺児という境遇の苦しさがあったり、電気も水道もないような環境で暮らす不便さがあったりしたが、みんなまぶしい笑顔で学校生活を過ごしていた。また、どの施設でも校長先生や施設の方が教育の重要性について熱く語っており、日本では当たり前のように感じていた教育の重みを改めて感じた。
- ・ 各施設で働く日本人から・・・
恥ずかしながら、入国する前はこんなにもウガンダで日本の支援が進んでおり、たくさんの日本人がウガンダの発展のために働いているなんて知らなかった。教育・インフラ・難民支援・農村開発・農業など、様々な分野でご活躍されており、とても驚いた。皆さんのやりがいを知ると、「自分のやったことが結果としてすぐに目に見えて変わっていくこと」や「正直まだやりがいを感じられていない」など様々であったが、崇高な使命感をもって勤務されていることにとても心動かされた。

3. 現地研修の経験を活かす授業実践への意欲やねらい(授業・学校生活への活用)

- ・ 本校は外国人が各学年に5～10名ほど在籍しており、日本人の児童も外国について興味がある子が多い。特に、外国の文化に対する興味が高いため、ウガンダの日常生活や文化などを知るための異文化理解授業を行いたい。(バナナを頭に掛けてみたり、アフリカンミュージックで踊ってみたりなど)また、English Roomにウガンダの楽器や絵画・置物を並べたり写真を掲示したりして、環境の工夫も行いたい。
- ・ 外国のことを調べたり考えたりすることは、自分事として捉えることが難しい児童も多い。また、外国人とやりとりをする機会がまだあまりない児童も多いため、あしながウガンダとzoomでオンライン交流も行いたい。それぞれの国の文化紹介やあいさつ、よさこいソーランを通して国際交流の楽しさを感じ、外国のことを身近に感じてほしい。
- ・ ウガンダの課題や難民についても考える機会にしたいが、ネガティブな印象で終わってほしくないため、活動の構成に注意を払いたい。

4. JICA の国際協力事業の「良い！と思ったところ」と「今後あるといいなと思う視点」

現地で働かれる皆さんの、コミュニティへの溶け込み力が素晴らしかった。特に、「一緒にご飯を食べ、どこに行く時もついていく」とその秘訣を語ってくださった浦田隊員の笑顔がとても素敵で、どの施設でもウガンダの人たちが日本人の隊員や専門家のことを仲間として迎え入れ、リスペクトしていることが伝わってきた。「貧しくて開発途上の国に教えてあげる・協力してあげる」というスタンスではなく、「一緒に時を過ごして問題を解決していく」というスタンスで、皆さんがそれぞれに熱意をもって働かれていることがそういった関係の構築に寄与しているのではないかと考える。

5. ここまでの研修に対して「良い！と思ったところ」と「今後あるといいなと思う視点」

毎日の振り返りが研修の効果を高めたと考える。メンバーの先生方は様々な分野を専門にされていて、1人では気づけなかったことや考えない視点をお持ちだった。移動の際や施設内で意見交流する時間では得られない学びと気づきを得ることができた。また、JICA事務所の方々や専門家、新聞記者など、教育以外をご専門にされている人の意見も自分にとって新しく、参考になった。

6. その他全般を通じての感想・意見など

現地での8日間、休みなく様々な施設を訪問し疲れを感じることもあったが、それ以上のわくわくと達成感を感じる事ができた。正直、教育以外の分野は全く分からず事前研修を受けてもピンとこないことも幾度かあったが、各施設を回って話を聞いたり実際に目にしたりすることで自分の知見が広がった。また、現地の人(日本人・ウガンダ人両方)との素敵な出会いに感謝している。

1. 海外研修に対する個人目標とその達成度

「勤務校の子ども達に向けて多様な文化への理解促進と互いを尊重する態度を養う授業を行うこと。」

海外現地研修を終えた現在の達成度は30%ほどと考える。授業はまだ行えておらず、単元計画も確定していないが、事前に勤務校の子ども達にはウガンダの子ども達に質問したいことをアンケートで聞いておき、それを現地で質問することができた。また、うちわ作りを通して、遠く離れたウガンダの子達に向けて、「どんなデザインや文字なら喜ぶかな。」と思いをめぐらせ話し合いができた点では、国際理解授業のよいスタートを切れたと思うという点で30%とした。

2. 訪問先から学んだこと(気づいたこと、学んだこと、感動したことなど)

- ウガンダという国の可能性。気候がよく、一年中米づくりができることから農業の研修を行う最適な地であったり、オープンドアポリシーを掲げ、世界で6番目(アフリカで1番)に多くの数の難民を受け入れたりしている点。民族的視点や歴史的視点だけでなく、経済を他の国々や人々と協力して成長させるなど、手を取り合って課題と向き合っていくとする姿勢は世界の一つのよいモデルとなっていると考える。
- 「アフリカと言えば…」という固定観念を取り払い、実際に見たり聞いたりすることから学ぶことの大切さ。アフリカの国同士のつながりは深く、ウガンダはそれらをつなぐ要として重要な役割を果たしていた。SDGsの視点から見てもアフリカ大陸はその目標達成の根幹となる熱帯雨林を多く有している。先進国や有力企業の思惑を優先して、アフリカをないがしろにしてしまうことで今後の世界に大きなしっぺ返しがあるかもしれないとも感じた。
- 自分とほぼ同世代の方々、もしくはそれよりずっと若い方々が、学生の頃から世界での協力事業への高い志をもっていたこと。学生時代に学んでいたことが現在の活動に直結していたことは驚きであったし、子ども達へのキャリア学習においても伝えたい。思うような成果がすぐ出るわけではないが、金井さんが「やりがい日常。」と話し、1日1日の積み重ねを大切にしていたことが印象深い。
- チャングリ難民居住区の子達の生活は困窮し、毎日を生きていくだけでもやっとという感じであった。しかし、だからこそ学校という場所の役割は大きく、生きていく希望となっているのが教育であった。学校教育があるからこそ医者や弁護士といった夢を子ども達が持つことができるという事実は、教員である自分には「できることがたくさんある。」ということを気付かせてくれた。エンテバ

動物園でも教育による保全を目指していたし、あしなが心塾の学生の皆さんも学びをもとにした自国への夢を生き生きと語ってくれた。ウガンダの現地研修で「教育」という言葉がキーワードであったことは間違いないと思う。

3. 現地研修の経験を活かす授業実践への意欲やねらい(授業・学校生活への活用)

- ・ ウガンダと日本の違うところを授業に取り上げ、「日本の当たり前は世界の当たり前ではない。」ということに気づかせたいが、「かわいそう。」「日本に生まれてよかった。」という思いで終わらせるような授業にしないようにする。日本と同じところ、似ているところにも注目し、お互いの文化・考えを尊重し、「同じ地球に住む者としてこれから支え合っていきたい。」という思いにつながるような単元計画をつくりたい。運営の方々にもお話しいただいた、必ずしも課題を解決することがすべてではなく、「自分だったらどうするか。」を子ども達と一緒に考えられるような授業を目指したい。そして、世界規模でのつながりのためにはまず身近な人から大切にしていくことも素晴らしいことであることを伝えたい。
- ・ つくばスタイル科(総合的な学習の時間)の国際理解、歴史・文化単元である「世界の国々の探検をしよう」を中心に計画し、キャリア、福祉、国際理解単元である「広げよう！夢・希望」に設定されている今後の自分の生き方を描く実践でまとめるような内容にしていきたい。その際には、現地で協力事業に携わる方々の努力や情熱についても取り上げ、子ども達が考える上での手がかりを提供していきたい。
- ・ とりあえず夏休み明けに、授業の範囲ではないところで、「先生の夏休みの思い出」としてウガンダで見て驚いたことや楽しかったことなどの旅行記を話し、ウガンダへの興味をもってもらえたらと思っている。
- ・ 6年生に対しての授業に加え、全学年に向けて発信ができるよう、ウガンダのことや私が見聞きしてきたこと、買ったものなどを紹介するような掲示コーナーを学校内に設けたい。
- ・ 隣接する中学校の7年生の時間もいただき、アフリカ州の単元で自身の経験を話す機会を設けることを企画したい。

4. JICAの国際協力事業の「良い！と思ったところ」と「今後あるといいなと思う視点」

「良い！と思ったところ」

- ・ 資金の提供だけでなく、現地の人達との協力を大切にし、寄り添うような支援を行っているところ。
- ・ 現地の実情に合わせた方法を考え、その国や地域に住む人々の何十年先のことまでを見据えて支援しているところ。特にカンパラ市の交通管制改善計画は印象深い。目的を交通の流れをよくすることに留まらず、地元の人たちの交通安全を第一としていて、交通マナーを広めるために動画募集型のキャンペーンを行うなど、寄り添う形で現地の人々の気持ちを育てていくという方法が素晴らしいと感じた。また、日本がそれを導いているという事実を誇らしく思い、感動した。

「今後あるといいなと思う視点」

- ・ JICAの国際協力事業は海外協力隊がよく知られているが、有償資金協力和無償資金協力という素晴らしい開発援助があることは、恥ずかしながら研修前の自分は知らなかった。ウガンダと日本にこれだけ大きなつながりがあることをもっと多くの人々、特にたくさんの若い方々、子ども達に知ってもらいたい。

5. ここのまでの研修に対して「良い！と思ったところ」と「今後あるといいなと思う視点」

「良い！と思ったところ」

- ・ 運営の皆さんのご計画のおかげで、有意義な視察を行うことができ、教育の面だけでなく、農業、生物学、経済など、多面的な角度から授業作りへの材料を集めることができた。
- ・ 事前研修の後の懇親会の計画や、あだ名を付けてお互いを呼び合うようにしてくださったことなど、今後の研修が円滑に進むよう運営の方々が配慮してくださったこと。(あだ名の大切さを実感した。)
- ・ 1日のふり返りを毎日行い、メンバー同士で意見を交わすことで自分にはない視点でも1つの物事

をとらえ、検討することができたこと。新聞記者の方を含めお一人ずつ、見たこと、聞いたことのとらえ方が違うことで大変勉強になった。もやもやしていた気持ちをすっきりさせることにもつながった。

「今後あるといいなと思う視点」

- ・ 現地での事務所報告会に向けて、パソコンでパワーポイント等の資料を作る担当を事前研修の時点で決めておくとよいと思った。今年度あった係の中では、記録係さんが同時に引き受けてもよいかもしいないと感じた。

6. その他全般を通じての感想・意見など

現地研修をふり返ると、国際理解の研修にとどまらず、自分自身とよく向き合うことができた期間だったと感じている。決められた期間と時間の中で情報を聞き漏らさないよう集中した場面が多いこと、どんなことを質問すれば授業につながられるかということをよく考えたこと、メンバーの皆さんの意見からつながりを見つけ一日の情報をまとめたこと、まだ知り合ってから長い時間を共にしていない先生方とどう連携・解決していくかを考えたこと、そして、出来ないなりに英語での会話に取り組んだことなど。自身の力を試されるような場面が矢継ぎ早に訪れ、あたふたすることも多かったが、最終日までやり遂げたことは自信になった。それらの中には普段私が子ども達に求めている力もあるだけに、まずは教師である自分が積極的に挑戦する姿を見せる大切さを改めて感じた。もちろん私一人だけでは乗り越えられなかったことも多く、同行してくださった運営の方々、先生方に優しく助けていただいたことには感謝の気持ちでいっぱいである。

1. 海外研修に対する個人目標とその達成度

- ・ 難民居住区にて、現地で聞き取り調査をさせて頂き、授業で活用したい(2家庭から詳細にお話を伺うことができ、授業で活用できそうです)
- ・ 訪問先で積極的に質問・発言する(大使館では委縮してしまったものの、その後は積極的に質問・発言できました)

2. 訪問先から学んだこと(気づいたこと、学んだこと、感動したことなど)

- ・ ウガンダは想像以上に「安定」した国であることを実感しました。(自分の当初持っていたイメージが大きく変わりました。)治安が良いのはもちろん、農業主体の国であり、「食」も豊富で、人も穏やかで優しい人が多い印象を受けました。
- ・ チャングワリの学校訪問のあと、どこまでも生徒がバスを追いかけてくれる姿が印象に残っています。

3. 現地研修の経験を活かす授業実践への意欲やねらい(授業・学校生活への活用)

これまで授業で扱うことが難しいと感じてきた「難民問題」について、実際に自分の目で見て、聞いて、感じたことを基に、生徒たちとともに一緒に考えていきたいです。

4. JICA の国際協力事業の「良い！と思ったところ」と「今後あるといいなと思う視点」

- ・ JICA海外協力隊の活動では、隊員が現地に根付いた活動を行っており、地域住民や同僚から熱い信頼を受けていることが素晴らしいなと思いました。
- ・ ODA事業についても、現地のニーズをよく把握し、日本との架け橋となっていることが窺えました。
- ・ 現地での2名のJICA専門家(山田さん・宮本さん)は豊富な知識を持たれ、職務を全うされており、ウガンダを、ひいては世界を大きく変えてくれる存在であると感じました。やはり「物質的な支援」より「人的支援」の方が、国際協力を行う上で重要であると再認識しました。

5. ここまでの研修に対して「良い！と思ったところ」と「今後あるといいなと思う視点」

- ・ 事前研修の際、「あだ名で呼ぼう」というのが、良かったです。年齢や立場など関係なく、参加者のコミュニケーションをとる上でとても重要なことだったと思います。
- ・ 毎日の活動の最後にリフレクションがあり、参加者全員で思いを共有する場があったところがとても良かったです。

6. その他全般を通じての感想・意見など

非常に充実したウガンダでの研修となりました！ありがとうございました。

1. 海外研修に対する個人目標とその達成度

- ・ 「肯定的に出会う」→達成度100%、なによりも出会った人たちがみなさんすてきな人たちであった
- ・ 授業で伝えられるような教材を持ち帰ること→達成度100%

2. 訪問先から学んだこと(気づいたこと、学んだこと、感動したことなど)

- ・ 価値観や文化の相違点→日本からするといろいろな点でこうした方が良い！と指摘したくなってしまうが、それを押しつけることが必ずしも良いとは限らない→幸せとはなにか？という倫理的な分野に発展する
- ・ 子供たちの純粋さ、学びへの姿勢に感動し、刺激を受けた
- ・ 難民をどうしたら減らせるか、難民の支援で持続可能な方法とは何なのか、考えさせられることばかり
- ・ 自分の「難民」への偏見に、運営スタッフからの意見で気づかされた

3. 現地研修の経験を活かす授業実践への意欲やねらい(授業・学校生活への活用)

- ・ 多くの授業で現地研修中に撮影した写真や動画をみたい
- ・ 特別な授業だと持続的に実践するのが難しくなってしまうので、なるべく私がずっと実践できそうで、かつ私以外の地歴公民科の教員にも実践してもらえそうな内容の授業をしたい
- ・ あしながウガンダ心塾とテレビ電話で本校とつなげたい

4. JICA の国際協力事業の「良い！と思ったところ」と「今後あるといいなと思う視点」

- ・ 技術支援を通じた自立への手助けをされており、とても良いと思う
- ・ 実現は難しいと思いますが、教員だけでなく高校生や中学生の交換留学事業などがあるとより子供たちに与える影響が大きいのではないかと思いました。純粋に自分が高校生の時に来たかったという重いと、いま指導している生徒たちを連れてきたいな～と思いました。

5. ここまでの研修に対して「良い！と思ったところ」と「今後あるといいなと思う視点」

様々な機関が今回の研修に対応してくださったおかげでとても有意義な研修となりました。ありがとうございました。

6. その他全般を通じての感想・意見など

JICA筑波をはじめとする多くの運営の方々のおかげで、自分だけでは経験することのできない本当に貴重な体験をたくさんさせていただきました。心から感謝しております。ありがとうございました。現地研修中は毎日たくさんの情報を得てたくさんの刺激を受け続けていたので本当に楽しく、充実していたのですが、それで終わらず、これから生徒たちにどのように何を伝えていくのかをしっかりと考えていきたいです。より多くの生徒が国際的な課題についてすこしでも思いをさせ、多面的な視点で物事を捉えられるようになってくれたらいいなと思っています。